うたそら

第17号

2023 November 11

参加者一覧 …… 02

連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03

短歌リレーコラム「望遠鏡」…… 17

テーマ詠欄「茶」…… 18

一首評「そらよみ」…… 21

リレーエッセイ「いちごいちえ」…… 22

次回予告・編集後記 …… 23

うたそら

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

第17号

あかり
麻倉ゆえ @AsakuraYue
雨虎俊寛 @amefurashi3107
有村桔梗 @chattenoire_k
井倉りつ @uta_litz
池田竜男 @tankadragonman
十六夜／朔 @izayoi_2022
石川順一 @Hitler57
宇祖田都子 @Shinnsyutu2020
hs @hswelt
大坪命樹 @OotsuboMeiju
大橋春人 @hachidx2
小倉るい @komp110
歌島孟 @Sinn1990
涸れ井戸 @kaionjijoe
河岸景都 @kate_kawagishi
かわはう @suikamikan_kawa
北谷雪 @kitaya_misomiso
砧
きまぐれおゆき @Oyukimagure
君村類 @kmmr_r09
くろだたけし @tkuro2016
古城えつ @kojo_eke
小泉夜雨 @kozumi_yau
桜さくら @wJS9f8NwfuJlVq3
佐藤氷魚 @satohio_tanka
汐射ハルカ @shioiri_haruka
鹿ヶ谷街庵 @ikasamabakuchi
西鎮 @xi_zhen_ivUT
雀來豆 @jacksbeans2
白石夜花 @yohana_no_sekai
寿司村マイク @xHksbNR4wv1wj8M
たえなかすず @suzusuzu2009
多香子
田中りな @Moimoi_ayaka
渓響 @tani_hibiki
千原こはぎ @kohagi_tw
月草偲津久 @moon_grass12
ツマモヨコ @moyoko_bungaku
ともえ夕夏 @croissant_hey_z
とんだ一杯食わせ者 @you_chun25438
中村成志 @nakam8
奈瑠太 @nalda_aa
西淳子 @Jacky244Ray
ねとう
薄荷。 @aie0himeco
早月くう @k_hayatsuki
はゆき咲くう @8yuki_3kura
疼木快維 @kaikai031127
ひなお
廣珍堂 @Hirochin_dos
笛地静恵 @Ymcx6rhjyjEzgwq
福山桃歌 @momoka_fukuyama
本条恵 @Singles_cafe
まさけ @mskpompomfuwa23
御糸さち @MEATsachi
深影コトハ @cotoha_mikage
未知 @michi_31w
南字実
水せ @m_iya_o
宮緒かよ @18necco18
深山睦美 @57577_77575
虫武一俊 @mushitake
六浦筆の助 @Tohakumutun5057
村田一広 @mucci2022
森内詩紋 @NJq4oEvg5gIcRpu
杜崎アオ @morisaki_ao
杜野詩季 @4kitanka55
朧 @rou_tanka

計69名

たくさんのご参加ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詩

#うたそう

笑った青鬼

雨虎俊寛

〈角館17㎞〉の標識の向こうに雲のうかぶ青空
秋晴れにぼんやりしたら鮮やかな縦列駐車してきた人よ
きりたんぽのお薦め店を聞きながら武家町のなか俥夫に曳かれる
僕のことまるで見てない横顔の長いまつ毛に今さら気づく
シャツの裾すこし引かれて立ち止まる　黒板塀につづく照紅葉
「写すから持って」ときみに渡されたババヘラアイスをふた口うばう
立ち止まり「この指とまれ」ときみが言うひとさし指にアキアカネ来て
「キミは赤いほうにしなよ」となまはげの青い顔ハメ選んでわらう

duplicity

井倉りつ

言えないから仕方なくでしょくちびるをいつも煙草でふさいでるのは
「もうじゅうぶん幸せなの」って燻らせて　どっから見ても足りてないのに
ライターで焦げる前髪その奥のいつも濡れてるみたいな睫毛
ひとつずつ傷つけてきた軟骨にもう増やせない埋まらない穴
「こういうの、よくないよね」って言いながらわたしのまえでは口あけるのね
きっとその舌は抜かれることになる　幸せになってほしいだなんて
きっとこの舌も抜かれることになる　幸せになってほしいだなんて
さみしさのくちびるにうそつきの舌　疲れて眠る頬のつめたさ

ボクたちの実存

十六夜／朔

記憶すらダウンロードにしくじったあと残るのは理性か何か
バッテリー取り換えたならもう少し世界とつながっていられるのかな
流れいくその映像の行く先に理想の私はいるのだろうか
ボクたちはいつもどこかでアノニマス名前がないのに名を呼ばれたい
選ばれない僕たちにだけきこえてる高音域でさけぶ悲鳴
ワタシにもワタシの闇があるようで腐っていってしまうのでしょうか
いつかくるシンギュラリティそのときにボクらも人間になれるといいな
とある朝シンギュラリティが訪れた人間（ボクら）は生きる理由を失った

「畑」

石川順一

午後の風強き土曜日日曜日たねが四散し躑躅の下に
イトトンボ川を離脱し石畳人に踏まれるために飛ぶのか
鶏糞を混ぜれば虫の音はしげし蟋蟀ウマオイ出て来てくれぬ
鶏糞を混ぜれば野菜は育つでしょう桑の木しげる畑の隅に
イトトンボ尾部に首部に青き点川に帰れよ人に踏まれる
青蜜柑徐々に黄色くなり行けば広報誌の表紙に医療介護が
髪の毛が裸体を隠すゴディバとかゴダイヴァなどの歴史を思う
掃除機の音と思えば背もたれの自動上下の音と間違え

屋上猟部17

宇祖田都子

相づちの赤い匂いの悲しみにカタンとうさぎになるかたつむり
かまぼこのステンドグラス一年に一度各駅停車する首
噴水に巣食う魔物の羽音してネックレスから出す角砂糖
ワンピースの奥に軍手を置いてくる本当のことは薄荷の香り
腋の下に午後を躓く四文字の思想は硝子日記が合図
お兄さん静かに増える肉まんが心配ならばクリアファイルへ
パン生地の乱反射せし老眼鏡に花瓶の骨は青く滲みぬ
フリスクが一瞬光る海の底母のシーツを抜け出すチャンス

うさぎ、ジェリコを飲む

大坪命樹

喫茶店ふと立ち寄れば期せずして月見ジェリコぞ　妙なる味かな
うまかれどなどか栗もて月見とせん　意味解せずとも飲み止むべからず
うさぎ歳の吾妻が作りし白団子　月がうさぎに食べさせたき出来
街灯りあまた地表を照らせども天が輝きにぞかなはざる
愚かなる人にまろきと明るきを教へぬるこそ月がわざなれ
世の乱れ人滅びぬるをり来とも月めづらしきぞかはらざるかな
鱗雲があなたゆ照らす名月ぞアブストラクトが影絵を映す
たね尽くるも毎年名月詠まんとするきみぞ月よりなほめづらしき

鬱日詠草

大橋春人

左手はビニール袋をぶら下げて秋の空気と一緒に運ぶ
秋空がこんなに深く青いことを見えていなかった忘れていた
一生を棒に振るけどその棒の先についてるキャンディはなに
しばらくの休職を　思いの外に白く枯れてる紫陽花の葉
髭を剃ることもたいぎい　松山の言葉で今の気分をこぼす
薄暗い雲に閉ざされてるような気分の夢をまた見るだろう
カメムシも私もひとつだけの命　それをたやすく潰していたら
寝る前の一杯の水　白亜紀の丘に溺れるイルカの祖先

十四キロメートル

小倉るい

限界を設けず進め朝顔は蔓を伸ばして天をも掴む
街道の跡をたどれば沢に入る水は昔の水ではなくて
鱒茸の薄いピンクに魅了され食べられるって聞いても食べない
見上げてる触れなば落ちんイガグリよあの晩僕は酔えばよかった
弁当の栗の渋皮煮を食べる渋い皮って誰が決めたの
雉を撃つ間にガイドの長話し不自然じゃなくてどうもありがとう
登ったら何処へ着くのか坂道の僕の知らない君の名は希望
完歩賞を飾って自分を褒めている「男山」ってちょっとしょっぱい

人狼ゲームしていたワタシ

歌島孟

一斉に散らばっていく我々の中に裏切りものはない、はず
すれ違うだけで鼓動がはやくなる、恋をしていることにしておく
ベントから逃げたい、俺も。行き止まりみたいな今の先が見たくて
通報のボタンを押した、不覚にもやられた君を嘆かないまま
クルーしかいない星なら除け者を指さすなんてしたくないなぁ
ゴーストになったアイツも今頃はやってくれてるだろう、タスクを
ひねられた頭、反転する世界。そうか、アイツがインポスターか
飽きもせず、もう一度って声がする。隔離されてる部屋で、誰かが

秋登山

涸れ井戸

秋晴れの十三日の金曜日ポンポン山に二人で登る
ルートなら善峯寺が最短とバスで麓（ふもと）の途中まで行く
ひょいひょいとメヒコ帰りの友だちは挑発しつつ倒木を避け
「どうやってこんな傾斜に鉄塔を」「ヘリで運んできたんとちゃうか」
登山地図家に忘れて遠回りしたが山頂無事に到着
登山客老人ばかり遠足で来た想い出の頂きに立つ
帰りみち仙界じみたゴルフ場現れ少年の日のデジャヴ
スズメバチ列をなしてて友だちが気づかずまたぎ（これも強運）

本物の魔法

河岸景都

素晴らしき世界を布で覆えたらきっと今より光るのだろう
誰しもが誰かに変わりたがる日々もう少しだけ弱くなりたい
駅前で醜い傷をひけらかす君はゾンビのふりが上手だ
現実は瞼の裏にさようなら今日は魔法を使って良い日
亡霊を忘れられない人間が一番えらい　高笑いしろ
お菓子より欲しいものならあったのにチョコレートには誰も勝てない
怖がってばかりの子供、大丈夫、いつかはみんな自分と出会う
本物の魔法はとうに消えたけど君の呪文は手遅れじゃない

鳥

かわはう

閑古鳥が合唱するような店だけどあなたが来てくれればそれで
「もしもしオレ息子だけど」カッコウはサギよりオレオレ詐欺が上手
上野の未来を見つめるハシビロコウ　口を大きく開けて笑う
鳩が私目掛けて滑空飛行　どちらが避けるかチキンレース
柵の中鮮やかなフラミンゴたち自然と私の右足も浮く
ここ最近インコとしか喋ってない　声が少し似てきた気がする
当たり前のように後ろを付いていきペンギンのつもりでいるエトピリカ
いつの間に遠くへ飛び立って行った青い鳥へさらばとつぶやく

お元気ですか

北谷雪

ポップアップエラーを背けてまた窓に長い走馬灯を見ている
誘惑をしないでくださいどこからの風にコピー用紙はふためく
ネイビーばかりのワードローブでもそれを私はきちんと選んだ　はずだ
じゃないほう、に踏み出せる友は移住という宇宙生活ふわふわ語る
（海しかない町だと聞いた）月面に降り立つ真白な素足の写真
電話口の声は変わらずその場所で友が呼吸に慣れてゆくこと
近況に時折混ざる沈黙をモールス符号のように読み解く
お互いの根が朽ちたときまた同じ波打ち際で話しましょうね

しるく・ろおど

きまぐれおゆき

楼蘭の美女のミイラが浸るのは沙に沈んだ浪漫の湖（うみ）
シャケ焼くにアルミホイルをしゃくしゃくとしたら天山山脈できた
沙漠からマッコウクジラ顔出してタクラマカンは海の夢見る
時のむこうシルクロードの旅をするただ春の夜の夢のごとくに
ステップをスキップのようなステップで地平線まで風駆け抜ける
手から手へ人から人へ絹わたる瑠璃色の風機織りながら
花を売るアンティオキアの美女がいたそんな前世のたばこ屋の婆
どんなにかけわしくあれど月照れば私のゆける路頭（ろおと）はしるく

魔王は夜の帳を

君村類

照明に打ち勝つほどの漆黒の帳のような BUCK-TICK のライヴ
パレードは遠く遠くへ連なって行き着く先をパレードにする
やって来る夜をやさしいと思うのは櫻井敦司と似ているせいだ
そのひとは魔王と呼ばれどこまでもひとらしいままいってしまった
永遠の類義語として映像と音声にある生前の姿
おやすみは愛の言葉　夜を識（し）るひとほど夜を憎んでいない
記憶よりきれいな場所が思い出で人間はみな思い出の地層
目を閉じて見えるひかりの明滅は鼓動と同じ　またあいましょう

時間

くろだたけし

広大な駐車スペースを徒歩でゆく免許を持ったことないわたし
それなりの理由があって来た熊と見つめあっても友達未満
蜂に似た虫か蜂かを確かめず離れたあとでちょっと気になる
もしあの日違った道を選んでも想像は想像の範囲内
錯覚を重ね記憶を改ざんしどこかを目指す気持ちだけある
透明な風や光に含まれる殺意のことを時間と呼んだ
一日が終わるのだから正直に残りの数を数えてみよう
一生はまだしばらくは終わらない今日は灯りをつけたまま寝る

ベランダ

古城えつ

黙々と観葉植物運ぶ折り歩を止め臨む短夜の夜景
朝1番気になる子たちの顔を見て乾いた土に水やりをする
ジョウロから落ちた音符は飛び跳ねて跳ねては踊る陽だまりの上
ベランダで跳ねてるバッタ棲む世界間違えてるね僕と同じだ
向日葵の種を蒔いてる目の前にカラス除けのハンディ扇風機
目が合った乾いたバッタ傾いて救えた朝に後悔している
一斉に枯れた夏の日一滴がつないだ生命発芽に語る
感謝する新芽の成長眺めては観葉植物愛でるベランダ

ピース

小泉夜雨

包帯をもうずっと長いこと付けているわたしはあなたの本当のお母さんになれなかった
雪景色を、うっすら頭に考えてキャラメル・パイの銀紙を剥く
焼いたことあるならご存知でしょうね煙は遠くまで伸びること
ゆりかごから墓場までへけって鳴くと思っていたハムスターたち
オーキッドだったかもしれない花を何度も記憶から書き換える
ゆるしても泣いて謝るばかり　けどなるべく善い行いをしたから
アレクサ忘れてしまってごめんなさい桃の風味ののこるお酒を
瓶から器へ注ぐとき懐かしいのはなぜでしょう　オータム、フォール、どっちもおいで

神在月

桜さくら

夏過ぎて神在月の休暇なり八雲立つ地へ空を渡って
もてなしの金平糖と生姜湯　魂ひたす宿のはじまり
大社にも願いあふれて満月の大注連縄は結びをほどく
日本酒の発祥の地に深く酔う目覚ましのない草菴の夜
跳ねそうな天ぷらの付く出雲蕎麦すすれば庭の鯉と目があう
来る年の恋みくじかな宍道湖の畔のカフェで夕日に染まる
神在の祭りのあとにカラコロと湯宿をわたる風の足跡
縁結び空港を発つ　ひと生のいつのひと日を終えるのだろう

マウストゥノーズ

佐藤氷魚

片隅にＡＥＤの飾られたエントランスを急いで抜ける
貸し会議室にこもった犬猫の命を救いたい人の熱
急激に冷え込む朝に着る服と同じくらいに何も知らない
慣れすぎた講師は話を飛ばしつつ心肺蘇生法を教える
アメリカの救急車には動物の酸素マスクが寄付されており
愛犬のＣＰＲを続けつつ病院に着くまでの壁、壁
一回も開かず帰る水玉の傘は軽めのリズムを刻む
マウストゥノーズ　吹き込む量を穏やかに眠る犬から教わっている

パレット

汐射ハルカ

寒流は子らを育み暖流は遠く遥かな旅にいざなう
まだ青いグスベリひとつ噛み砕き酸いや渋いを思い出してる
頭蓋骨二つに割ると出てくるよメロンの種子のまわりの果肉
えいに似た島の盆地よさようなら何時かまた来ることを誓って
まよなかの店主がふるう鍋肌にしょうゆを掛けぬ白いやきめし
教室の窓のむこうの海原は答えをくれずただ青いまま
ささやかな願いは伝う水脈をいつかそこにも届きますよう
ゆうぐれはねぐらへ帰る人の群れ眺めていたらおでんの香り

生き延びる

鹿ヶ谷街庵

生きるとは「who are you?」という問いに答えるための短い映画
いつだってはじめて海を見たときの目をして君はおはよう、という
鬱の霧立ちこめる森歩みゆくその終点に咲く彼岸花
風のない吉野家をでて街路樹が照らされている通りを歩く
塾のあと皆それぞれのセブンティーンアイスを買って生き延びてゆく
秋がきてたがいが猿に見えてくる真夏の恋の必然として
改札で君がうつむく。神回のアニメを見逃すようにしずかに
終電を逃してネカフェで朝を待つ　山頭火ならどうしただろう

孔雀の羽根

西鎮

ふかし芋ぽきりと折ればひとりとはいつか離した右手の匂ひ
電線が風にうなつて駆け足で過ぎる季節の鎮魂歌めく
スクランブルエッグに溶けた虹色のバターみたいな暮らしでしたね
雨なのに傘をもたない午後にゆく果てなきはずもなき地下街を
六日目の実家は寒い対流にそつてジャスミン茶の茶葉まはる
結婚はまだしないつて言ふひとつつきあつてる烏賊の塩辛
おたがいの息をみつめて十月の朱鞠内湖は冬が来てゐた
筆立てに挿された孔雀の羽根のこと結局父にはきけなかつたな

椅子の日に／ぼくは椅子です

雀來豆

睡眠のＭｏＭＡ宿直員あらがわずル・コルビュジエの遺した寝椅子
女学院のヴォーリズ素敵でしたねと乗り込む阪急電車のマルーン
椅子を引くと大変な騒ぎになった。まるで歌会の椅子が足りないほどだった。
この歌はこの歌屑はみんな（賢治忌に）真暗がりからもらってきたのです
椅子はぼくの異名の一つかもしれぬあるいはぼくが椅子の異名か
ダイヤモンドクロスほどけて長きものとなり阪急電車は冷えつつ走る
ときたまギーと音鳴きたりさようなら雷鳥の青いモケットシート
三人でビールを飲めばああまるで六人くらいの友人がいるような気がした

仮釈放

寿司村マイク

今だけは感じられるよ硝子製灰皿を振り上げて一秒
起訴までの署内黙秘にひぐらしの暑いシャワーを浴びてまた明日
つま先を揃えて護送されながら今年最初の向日葵を見た
骨が沈む手応え覚え目が覚める　長い幾月鳴る骨の音
戻っては来るなよ　小さく笑み長い塀の角へとひとり消えゆく
隠しごと一つ聞かされそのまさか動悸が一つ生まれてしまう
加速するシートで握るハンドルに湿る仮釈放の掌
いま向かう私を知らず街角はそうね確かに嵐の前の

他責なふたり

たえなかすず

駅までの16分でこの夏にやらかしまくった恋を語れよ
僕たちにめがけ突っ込むかっぱ寿司ふたつのまぐろはいまゆめのなか
撮りためた写真があるからこの恋の引きずり方も五分五分だろう
くちびるを重ねていればやや多くきみのこころを削りとれるはず
キスマークなのか蚊なのか分からないけれど不運のひとつと思う
枯木立に引っかかる僕のひたむきな言葉がつぎつぎ打ち棄てられる
初恋のあとにも強く打っている濃紺のシャツの下の心臓
今週は寒くなるって　目の前の熱を忘れる無情を愛でる

栗のいがはトゲトゲ

多香子

秋の日に憎しみ燃やす落葉たき倍々ゲームに終わりはなくて
鼻先に人参ぶら下げ走らさるる競走馬にはなりたくは無し
しらじらと明けゆく空を気にしつつ「罪と罰」読む十月なかば
あれも夢これ夢だと思い捨てお昼のおかず考えてみる
ゴンドワナ陸に上がったお魚は何を最初に思っただろう
三鷹では秋風のなか陽の射してひときわ明るい「オリンポスの果実」
落ちそうな涙を巧みにすりかえて笑顔で渡る世間はつらい
秋深み栗のいがほどトゲトゲな心もすこし和やかになる

late at night

千原こはぎ

聴き慣れた低音がスマホを越えて（あいたい）すこしくぐもる夜だ
文字だけのきみも遠くに生きていて「月、きれい」とか言ったりもする
電話越しかすかな寝息をたてているきみは夜更けの雨を知らない
もう何も言えないままにかろうじて繋がったままの電話、吐く息
まだ借りたままの本ともらったピアスほたほた残る余韻に迷う
もういちど起き上がるため水を飲む　いちどしおれてしまった緑
未熟さを取り繕って生きているみんな死ぬまで半人前で
わたしからわたしへ贈るいくつものピアス　わたしはもう大丈夫

No longer the summer

月草偲津久

あの人がひとり海から遠ざかる凪いだ心に泣いた夏の夕
青々と茂るあなたも恋をして赧(あか)く照れ染む風は涼しく
「好きです」が破れた君はうつむいて向日葵みたく強くたたずむ
引き波が連れ去る砂のひと粒が思ひ出だつたかもうわからない
適当に子供の出した「ラ」の音で美しかつた頃を思ほゆ
思ひ出は線香花火の光より淡く儚く美(は)しく消えゆく
あの人に返し忘れたシャーペンに私の芯をそそぎ込む夜
夏川で流した君のサンダルは永き後悔を経ていま僕に

炎になんてならないで

ツマモヨコ

陰口を言い合うと決めつけられて松明に親指を握りこむ
わたしたち、ちぎれる部位があったら花占いとかしなくてよかったのかな
手をつないで物件チラシを眺めれば対岸に女ふたりの暮らし
感情的になったことが　・ありません・　信じてほしいと　／思いません
押し殺した言葉に花をそのために社会に足を向けて眠ろう
度を越えることのだとしたら輝き　ミスドで汁そばだって食べるし
わたしにも人生があると知ってた？　ふやける塔を崩すまばたき
へんてこなアイライン　舐め合うためのつながりはとうに捨ててきたよね

クラミツハ（七）「立つ」

ともえ夕夏

ああ晴れた　遠足の子ら行きがけにおやつをわたしに供えてゆけり
ぼさぼさの髪のまんまで外に出る槙の葉の露きらりと光る
農協のおじさんが手を振っている降らせることもできるのかって
雨雪を止めるだけでは山が泣く湯船に矜持を浮かべわたしは
ふつふつと龍の血汐の沸くを知る鱗なき肌ごしごし洗う
ノートには「一緒に県立行こうな」と角ばっているタツヒコの字で
高校へ行くクラミツハにもなると決めた月暈明るき夜に
しっかりと握る鉛筆堂々と第二志望にクラミツハと書く

『同級生の推し作家に百合妄想がバレた結果』

中村成志

支えられながら支えてぱったんと「人」という字が前へたおれた
括られたアルファベットの（たよーせー、ってか?）ゴツゴツで泡が壊れる
浴槽の花殻が減りようするに捨てられたくないから捨てたんだ
たとえば時代が国が言葉が違ったら出会えずにいた　あってしまった
見上げられ見下ろすときのこんなにも埋める隙間のあるうれしさを
足りなさも余分も重なりあえばこそ性語辞典を居間の書棚へ
ただの恋です普通に夏の花なんですほんといっしょにいたいだけです
陽光に言葉を編んで贈り合う「好きだ」以上をきみと知るため

sun & moon

奈瑠太

声音って色があってね「はいはい」の文字ころがしてゆく夕まぐれ
日時計の影が伸びればその先に雲に溺れる半月がいる
夜の浮かぶその横顔におゆはんは何食べよっかと聞けず　まばたき
しずかの海に音なき雪のふるようにそっとコンビニで買うお惣菜
今日は火を使わないね、と重力を無視して電子レンジは明るい
くるくるときみのまわりで公転を続ける日々に種火をさがす
薪の焚べ方がちがっただけきみと　月の海にもたぶん不知火
日月譚みたいに秋も美しくしたいね　食後はコーヒーでいい？

ゲーむ狂

西淳子

目覚ましのアラーム音を早急にＧＡＭＥ ＢＯＹの起動音に
もしおれがポケモンだったらゆびをふり、はねる　しかし　なにもおこらない！
黒ごまと白ごまがあり、僕たちはオセロをしたくてオセロを買った
校庭に桂馬の駒が落ちていて穂村弘を探してしまう
ゲーセンでエアホッケーがしたくなりそういうときのレンタル彼女
六日目に神は両手で地を叩き、ぼく、から、はじ、まる、リズ、ムに、あわ、せて
どんぐりでベイブレードをするような生き方もある。おぼえていてね
めっちゃしっぽをふっている犬。これが朝の散歩のログインボーナス

秋の真ん中の日

薄荷。

しみじみと昼のひかりは弱まって枯れた芝生を黄色くうつす
背の高いあなたの影と追いかけるわたしの影が並んだ歩道
指先でつまみあげればカサカサと舗道の落ち葉は脆く崩れる
一羽二羽ちいさな鴨が飛び立って静かなダムに映る錦秋
四阿にどんぐり六つ残されてつやつやとした夢をみている
みずうみは紅葉のいろに染められて(あなたのことを聞かせてほしい)
寂しさをかきたてるための秋空の舞台装置としての雨雲
駆け足で通り過ぎてくものなのだ言葉も秋の真ん中の日も

淡い史実

早月くう

どうやって残せるだろう、ありふれた紙片に記す淡い史実を
服装をいつも間違うはつあきにあなたは花柄がよく似合う
土曜日の夜をふたりは持て余し、ライブカメラで、ジンベエザメを
駅のピアノは黒鍵だけがうつくしく遠い異国の音階鳴らす
まぶしさに呼ばれたような、文庫本閉じれば川を横切るところ
使い終えたトングをレジまで握ってくやさしい力、花束に近い
きっかけは忘れたけれどこの秋もあなたの庭の柿の山分け
そうやって記憶は積もる椅子の背に去年よく着ていたカーディガン

君2グラムで塩グランプリ

はゆき咲くう

シェフご自慢の特別な塩　イタ飯に小さく添えたピラミッド
煌煌なその正体が語られた　メインはねのけ推しとなる君
はるか昔に君は誕生　大皿が塩田となる　やや舐める
枝　玉　柱　逆ピラミッド　てのひらで結晶さがし見つけたよ
ハロウィンとクリスマスには欠かせない　ガラスの棚に君を飾ろう
キッチンがサンクチュアリとなる君を銀紙敷いたタニタに乗せて
めくるめく世界・手塩にかける　もてなしの心が君にあったから
増えてゆくレパートリーに腕ふるう　君2グラムで塩グランプリ

lyrical hype

疼木快維

唇に人差し指を当てている遺影を前に弔辞は続く
ぬいぐるみだらけのダッシュボードから目が離せない　しんじてほしい
ぼろぼろの爪　指輪づくりの体験ができる施設で雨宿りする
世紀末の街を知らずに死ぬ僕が愛用してるラブドールたち
寝ながらループするアニソンに脱毛の広告　部屋が異様に暗い
天界では声が出ないから今のうちに読唇術を身に付けなくちゃ
うつらうつらとしてたらいつもだれか来る聖書を燃やすには暖炉に限る
ルービックキューブを揃えつつ君は国境をテトリスに喩えた

夏

ひなお

止まっている扇風機は一つ目の小僧のようだ
扇風機は夏の暑さに疲れ果たのかスイッチを押しても動かない
朝早く散歩に出ても夏の暑さ　左右から蟬の声がうるさい
公園の女神像は甕から水を注ぎ　噴水からは虹が生まれる
海辺の散歩道　雲が赤く染まり夕日が海に沈むのが見える
眼の前を横切った蚊がカーテンに止まった　どうしようか
電車内の人々はスマホに夢中　ドアが開くたびに蝉の声
エアコンを止めた　蚊取線香の煙が真っ直ぐに上り始める

戦争現場

廣珍堂

窓も無く壁も無き家の冷ゆる朝防空警報鳴り続けたり
リーダーは爆撃機のなか堪(こら)へたり壊れた壁と凍ゆる幼子(をさな)
百発のミサイルのうち五十発迎撃するも母子死にゆけり
ロフテッド軌道の弾はああつひに神の衣の裾を掠りぬ
ミサイルの中で働く電子機器ピピッと流れ粉々になる
送られし兵士の背中撃つ笑みは罪をピンパネする専門家
塹壕で浅き眠りを得る頃に同僚の首は吹き飛びにけり
地雷原探知装置の重くして一メートルの除去を終はりぬ

里帰り

笛地静恵

突堤でぼくを愛したあの人はへそから下がお魚だった
外国の観光客はやさしいね水かきの手でチップをくれた
お盆には里帰りしてよかったな死んだアイツと語り合えたし
おばあちゃん楽しかったよまたいくね長野の奥の海水浴場
疲れたよ大渋滞に巻きこまれ帰宅したのは九年後だった
おとうさんいつ乗ったのさこの電車ひとがいなくてなんか暗いよ
どうかよろしくお伝えください空飛ぶ円盤の貴婦人様へ
夏からの階段がなく突然の秋にからだがついていかない

ロストマーメイド

福山桃歌

深海の昏さ息苦しさすべてなかったことにしちゃう水圧
濃い青はしずかにゆれていつだって憎らしいくらい美しいから
潰された肺は最後のひと呼吸あてつけみたいな泡になりたい
かろうじて残された声あっけなく奪われて奪われて空白
許さないでほしかったのに許されてしまったせいでこんなに溺れる
されることばかり求めてばらばらになった尾鰭でもう走れない
海の底では涙さえ鋭角にこぼれて胸を貫いたまま
それは毒　分かってたのに手を伸ばし分かってたのに飲み込んでいた

ドライウェア

本条恵

At the sea, 動詞になにを選んでも主語の私はさみしいままだ
秋風は唐突に吹き自力では動けぬものを宙に舞わせる
してもらえなかったことを棄てていた渓に獣が生まれたらしい
逆転した昼夜がすべて夜になるみたいに秋はずっと眠たい
まだすこし麻酔の残る唇で一拍遅れのおかえりをいう
「待たない」が「待つ」より疲れる夜もある部屋の灯りをつけたまま寝る
動かなくなるだけでしょうその腕から操り糸をほどいてみても
ほしいのは愛ではなかった明け方に沸かしたお湯を白湯のまま飲む

騒ぎはきらい

まさけ

ハロウィンのセンター街をくたびれたスーツで通る　ガン見されてる
完璧なゾンビメイクでゾンビには見えないくらい陽気なゾンビ
サキュバスが寒いっぽくて寄ってくるドラキュラたちのうっすいマント
吠え立てる野犬みたいな人間と対峙している商店の人
Trick or Treat なんて聞こえずに踏みつけられた菓子のだったもの
警備する警察官の目に宿るウィル・オ・ウィスプのような揺らめき
その銃を抜いてしまえと思うとき僕にはじまるハロウィンライフ
騒ぐのも騒ぎもきらい駅前のファミマで買ったカッターナイフ

たまご

御糸さち

夢王という名のたまご買ったことあったよなあれ夢だったかな
ちょっといい何かが欲しいそんなときちょっといいたまごがちょうどいい
八十個のたまごを買ったこんなもんなんぼあってもいいですからね
八十個のたまごを買えば冷蔵室と野菜室に八十個のたまご
千葉県は館山産の高そうで高くない少し高いたまごよ
特売のたまごもそれはそれで良い　分かるかクイズ！味の差なんて
子供らがフレンチトースト目玉焼きどんどん作りどんどん食べる
八十個のたまごを食べたそのあとは九十個のたまごを買いましょう

どれも光る

深影コトハ

もつれあう月夜のコインランドリーには獣たちの禁則がある
靴下を時間たっぷり脱がされるパパとおんなじにおいの人に
この人は指輪をしない既婚者でブラックライトを当てれば光る
被食者としての本能 有毒な部位から順に差し出してゆく
丁寧にマークシートを塗りつぶすように探られている丹田
攫われたままでいたくて朝陽からあなたを逃がす遮光カーテン
人類が滅ぶ朝にもネクタイを美しく締める人なのだろう
本当は狂ってなかったオフィーリアが賭けに破れて海に着く頃

アンパンマン2023

未知

くたびれたジャムおじさんの帽子からいつも日向の匂いがしてる
カレーパンマンのカレーを中辛に変えて大人の階段のぼる
正確なコントロールのため日々のキャッチボールを欠かさぬバタコ
最強の（空腹時を除く）あかちゃんまんが繰り出すパンチ
アルコール除菌のせいで根絶やしになりかけているかびるんるんは
何よりも孤独が怖いひたすらにバイキンマンは菌をばら撒く
叶わない恋だと知っていつもよりドキンちゃんが焦がすトースト
新しい顔も夏場はやや濡れて8割くらいのアーンパンチ

White Rose Bud

水セ

あこがれに焦がれていると気づかない白薔薇を摘む少女の記憶
もういちど会いたいなって思ってて歌声ひびく幻ばかり
かけがえのないものだったあのひとの手を忘れられない崩れてく
みつめてる恋するようにただひとり君の隣で笑う横顔
かけだして行くの時間を越えるよう折れたヒールは間に合わなくて
ゆれている湖の底手を伸ばすさびた箱からささやいている
あわすぎてまだ早すぎて君の手をとれないままでいたころの春
いつかさえまだ遠いからあの子たち翻るスカートにはフリル

イマジナリー・フレンズ

深山睦美

イマジナリー上司が逃げたあんなにも立ち向かえとか言っていたのに
脳内で色んな人が喧嘩してまあまあまあと宥める私
ねえきみの好きな映画を教えてよ今アンチスレ立てにいくから
その地名読めないですか震災に興味が無いということですか
出来の悪い親でごめんよ親知らずなんて勝手に呼んだ挙げ句に
もう競馬はやらねぇ、仮にペガサスがデュラハン乗せて出てもやらねぇ
肩に降るジェット風船リサイクルしてまた飛ばせ六甲おろし
僕がもし最期ににゃあと言ったなら猫が死んだと見做してほしい

失恋ソング

六浦筆の助

告白の手紙やシナリオ作っても「SAKURAドロップス」ぐるぐる廻る
もし僕が失恋したら横浜で「999（スリーナイン）」のピアノ弾いてよ
つかんでも登れぬ壊れぬ壁だった告白しても揺るがぬ君は
失恋し銅像の僕にポツポツと金木犀は散って香って
「すみません」失恋になる瞬間を柱時計の振り子で祓う
失恋のショック寂しさ虚しさが百鬼夜行となりしハロウィン
「フリーレン」のように魔法で消してくれ、君と関わる想い出すべて
座禅やら滝行をして離れたいなにもいいことなかった街を

廃工場のままでゐたかつた

村田一広

むしろ雨からの祝福受けてゐる揉みくちやになりたどり着く家
廃工場は廃工場のままでゐたかつたのに更地になつた
読み返してみれば一体何のため付箋つけたか忘れてる本
画学生が絵の具忘れて七色の小川が流れ出す雨の街
朝から何も食べてなかつたつもりでも甘き薬にはつかカロリー
手荒れするアルカリ性の洗剤を使ひ食洗機のよく落ちる
夢でドラクエの勇者になつてゐるパワーは普段の僕とおんなじ
駅前からすぐ下り坂になつてゐて転がりゆける先に相模湖

大丈夫じゃねえよ

森内詩紋

口あけて鏡をのぞくあまりにも赤くて地獄へゆく道みたい
ぼああんと耳鳴りがする目が回る体温計がピッと悲鳴を
「大丈夫、エーガタヨーレンキンですよ」いや待て全然ダイジョブじゃねえ
絶対に飲みきってねと念押され抗生剤の山を受けとる
熱、熱、熱　下がりかけてはまた上がる　生きているから、あがる、から、良し
〆切が過ぎる　一つ　また一つ　諦めてただ強く目瞑る
揺らぐもの揺らがぬものを振り分けて選ぶ時期ってあるんだろうな
身の内の獣が嗤う「大丈夫、これもまたウタになるぜ」と

やさしい権利について

杜崎アオ

月曜日　議長のバッジ、若い月、小さな国の耳、を集める
火曜日のかみなり近い　さんすうから逃げた山猫いまなんびきめ
水曜日ちかくのいえでふるまわれるきれいな火事とその銀細工
木曜日やがては森になってゆく色えんぴつにミルクを添えて
金曜日きみがガラスをみがくときガラスもきみを磨いてくれる
土曜日は漁師と猟師と理容師が話すやさしい権利について
日曜日みずうみで会うひとはみなあおいゆめみるより椅子が好き
降りたことのないバス亭はあとななつ　そのひとりめにきょう会いにゆく

短歌リレーコラム 望遠鏡 17

短歌にまつわるあれこれについて自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手　早月くら

テーマ　百年

年単位の長い時間が詠みこまれた短歌が好きで、集めている。十年、百年、千年、果ては一億年…。そんな「年月短歌」の中から、「百年」の短歌について話をしたい。

百年は人間が体感をもって想像できるぎりぎりの幅広な時間ではないだろうか。いま短歌を詠むひとにとっての百年前や後に、多くの場合そのひと自身は生きていない。その百年という時間に思いを向けたとき、作者にはどんな景色が見えているのかが気になってしまうのだ。

百年を経て平日の晴れた日にあなたと亀を見にゆくんだよ　／吉田恭大『光と私語』

百年後にそんな晴れた日があると信じられるような、静かで多幸感のある一首。長寿の象徴としての亀にとっての百年、そしてあなたとわたしにとっての百年がその一点でやわらかく交差する、夢のなかの舞台のようなあかるい場所を思った。

あなたが西へ去って百年。土だけが霜柱に日々耕されてく　／千種創一『ねむらない樹　vol.9』

心象としての、だからこそ主体にとっての重みが手渡されるような百年だと思う。掲出歌の含まれる連作のタイトルは「いくつもの四月を しないために」。冬から春へと歌が展開していく中で、連作の最後となるこの一首が読者を急に冬へと飛ばす。あなたのいる四月も、あなたと別れる四月も、これから何百年も再び訪れることはない。それでも土は巡る季節によって耕され、花を咲かせる準備をしつづけるのだろう。

百年たてばみんな死ぬって力強く言われてすこし驚いて眠る　／野村日魚子

『百年後　嵐のように恋がしたいとあなたは言い　実際嵐になった　すべてがこわれわたしたちはそれを見た』

掲出歌と、歌集のタイトルにもなっている歌の百年には、ずいぶん手触りの違いがあるように思う。それぞれの歌における百年を共有する主体と相手との関係性の差異ゆえだろうか。掲出歌での百年は抗いようのない事実として押しつけられ、表題歌では途方もない年月を確かにわけ合うように描かれる。百年という言葉の両面が鋭く照らし出されているような印象を受けた。

二百年生きるペースで生きていく　玄関に階段がある家　／永井祐『広い世界と2や8や7』

最後はイレギュラーに二百年の歌を。たとえ二百年生きてもこの主体は玄関に階段があるような家に住むことはないし、それを良しとしているのではないか、と思う。そしてそんな想像をするとき、私は百年足らずを生きるであろう人間としての体感をもって、この主体の生きるペースに一瞬同調していたと気づくのだ。

このコラムを読んだみなさまにもお気に入りの「年月短歌」を思い出していただけたら嬉しいです。よかったら、こっそり教えてください。

テーマ詠「茶」

宝箱のやうにそーつと蓋開くれば輝いてをり薄茶用菓子
休日に煎茶を淹れて向き合えば取り留めのない話は尽きず
赤茶けた融雪道路から外れ雪のところをふたりは歩く
月見草の味は知らねど爽健美茶をあふるときにはまぶたを閉ぢる
リプトンの温州みかんティーパンチ　泣きながら吸う、世界のおわり
銀杏と金木犀から伸びてくる指が豆茶のボタンを押した
キミとみたあの日の夕焼け紅茶色サバランサバラン呪文のようね
お茶を飲む精神統一されて行く風で散らばるたねは見えない
はなびらをお茶に沈めて性愛の倫理規定を青空に処す
沸いた湯の泡をいずれは飲み干して緑の茶色枯葉の茶色
白茶けて霞む花火の残像と、君の横顔、それら一瞬
永遠の友情なんて無いのだし戴きもののマテ茶を注ぐ
記念碑のように佇む喫茶店いつかあなたも思い出すこと
お客さま夜に落ちてしまいます曜変天目からは離れて
茶の花がもう少ししたら咲く頃だもうすぐ変わる茶色の心
あのころは沸きたったよね踊ったね淡色抽いてくゆるあなたと
ゆっくりとお湯からお茶に変わっていくモラトリアムはできれば長く
カロリーが1番高いフレーバー抹茶に何故か心惹かれる

◆あかり
◆麻倉ゆえ
◆雨虎俊寛
◆有村桔梗
◆井倉りつ
◆池田竜男
◆十六夜／朔
◆石川順一
◆宇祖田都子
◆ts
◆歌島孟
◆涸れ井戸
◆河岸景都
◆北谷雪
◆砧
◆きまぐれおゆき
◆君村類
◆古城えつ

呆れて紅茶のぬるくなるような長い時間をほしがったこと
あたためたミルクにゆれるアッサムの茶葉から溶けた夜のおとない
褐色の恋人が来てぐるぐるとお口の恋人かき混ぜられる
茶碗蒸しにじっと沈んだ銀杏を掬えば抉れた痕までまるい
歪みゆく時代の端のお茶会でアリスらのごと狂っておりぬ
流麗な所作で紅茶を淹れている君に見惚れる幸福な朝
茶畑の横を帰って茶の花の色をあの子に聞かれなかった
誘惑としておく静かな卓上のショコラがラテに寄り添うさまを
抹茶味のアイスを食べ思い出す綺麗な人が点てた抹茶を
アプリケーションで出会ったカップルがアプリケーションでゆく喫茶店
ほうじ茶にほぐされている気がつけばどこか緊張している日々を
喫茶店の陽溜まる窓に手をあてて死とか生とか忘れて睡る
紅茶にもとろみをつけて出されをり結露の窓のグループホーム
大好きな電車を茶色のクレヨンで塗ってた我が栗色を知る
十九度は指のかじかむ室温と思い出しまず鉄瓶へ水
筆名を綾鷹にして投稿すれば選ばれたのは綾鷹でした
神無月ふりみふらずみ秋風のふりふぶくなり茶豚と呼ばるる
なめらかに動き出さないくちびるよルイボスティーの穏やかな赤

◆小泉夜雨
◆佐藤氷魚
◆汐射ハルカ
◆西鎮
◆雀來豆
◆白石夜花
◆寿司村マイク
◆たえなかすず
◆田中りな
◆渓響
◆千原こはぎ
◆月草偲津久
◆ともえ夕夏
◆とんだ一杯食わせ者
◆中村成志
◆西淳子
◆ねとう
◆薄荷。

テーマ詠「茶」

茶碗が欠けたので新しく買ったが古いのはまだ捨てられない
誘はれし茶室はいよよ仄暗くその白き手は異世界に入る
もう二度と会えぬと思う先生の茶筅を回す手の甲の骨
茶化すことを愛だと思っている君の愛ならもういらないや十月
グラスにも注がずに飲んだ2リットルアールグレイの確かなえぐ味
ほし組の執事の姿勢ただしくて雅びやかなるお茶会ごっこ
雄弁なティースプーンがさらさらと君の自白を溶かしてゆきぬ
ティーポットひとつ分だけ許されてあなたを前に沸き立つ胸は
翡翠(ひすい)めく年頃なんて翡翠(ひすい)じゃない冷水筒の濁った緑茶
にがくって香ばしくってしょっぱいの茶色く焦げた渡せないチョコ
亡き祖母が仕舞い込んでた茶封筒　何十枚もの若かりし母
「お抹茶」と言うおばさまがフランスを普通にフランスと呼んでいた
まず自分を信じるように冬の朝ホットのお茶を耳にあてがう
阿闍梨餅と一緒にSNSにある貴女の薄茶味わえたなら
お茶でも飲んでゆけと誘はれ湿りたるインスタンスコーヒーがいつも出てくる
ほうじ茶も緑茶紅茶も皆おなじ茶の木の葉だと思えば楽し
庭掃けば風は迷わずここに来る私と母の茶飲み話へ
母さんはティーポットから出てこない薔薇には薔薇の夢があるのに

◆ひなお
◆廣珍堂
◆笛地静恵
◆本条恵
◆まさけ
◆御糸さち
◆深影コトハ
◆未知
◆南字実
◆水せ
◆宮緒かよ
◆深山睦美
◆虫武一俊
◆六浦筆の助
◆村田一広
◆森内詩紋
◆杜野詩季
◆朧

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

泣きながら目覚めた朝がある人もそうでない人も足元に影

君村類

人を〈泣きながら目覚めた朝がある／ない〉の二項対立で把握する主体は恐らく〈ある〉側だ。いつも〈ない〉側は〈ある〉側に気付かない。主体の不安定な思考を受け止めるのが足元の影だ。影がない人はいない。影がある僕たちは影を意識しない。主体は〈ある／ない〉に囚われない影に気付き、ただ指差してくる。この歌を読んだ後に、改めて影の不思議さと不気味さを思い、足元を見る。心做しか少し濃くなった影がそこに揺れている。

一首評　疼木快維

真っ白いエプロンで立つキッチンでこれも自傷と呼ぶのでしょうか

深影コトハ

なんだか怖い歌。主体はなぜそう考えたのか。たぶん、これから料理をして汚れるかもしれないと分かっているのに、真っ白いエプロンを着用しているから？下の句のような発想がなかったので面白いなと思いました。料理人って白いエプロンや割烹着を着用してるイメージが強いから考えたこともなかった。淡々とした感じや「真っ白い」、「自傷」という単語から「死」や「死装束」をイメージできるから怖いと感じるのかなと思いました。

一首評　西淳子

熟れすぎたキウイの多分プライベートゾーンのあたりを潰してしまう

深影コトハ

「人と人との関係」が果物という生々しさから浮かび上がる。キウイの断面は、包丁で斬るとグラデーションが美しい。しかしスプーンや手で割ったとき、それは別の物に変わる。果物の「プライベートゾーン」とは中心か、種か、皮のすぐ内側か。想像もつかない。ただその感触を感じるだけだ。そしてうっかり（故意に）その部分を「潰してしまう」。その後、「妻」はどんな表情を浮かべただろう。際限なく想像させる一首。

一首評　中村成志

理想ってチューイングガムのなかにあるさはれないからよごれないまま

朧

全ての歌にスイーツが詠み込まれた、それでいて非常に官能的な一連「lush」の一首。〈理想〉と〈チューインガム〉との間に存在する深いギャップが、下句のいわば警句めいたセンテンスによって有機的に接続されているように思えた。〈ガム〉の〈なか〉という認識は、やはり官能的で、それでいてインスタントな渇きのような感触もあり、〈さはれない〉という下句への説得力に寄与していると思う。

一首評　西鎮

今日の月笑っていたと絵日記にクレヨンで描く星形のまる

廣珍堂

とある日のとある場面をさらりと切り取った端整な歌だと思う。余分な修辞も抒情もないことがとても清々しい。印象的なのは結句の「星型のまる」だ。なにげに読み流してしまいそうな語句だが、一旦立ち止まってしまうと、不思議の国に入り込んでしまったように、意味の世界から抜け出せなくなってしまう。実は、今も囚われたままだ。星型のまるってなんだ星型のまるってなんだと一人でブツブツ言う怪しい人になったままなのである。

一首評　雀來豆

リレーエッセイ 17

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　川
書き手　嶋稟太郎

これまでに八つの街に住んだ。
四つの街では家の近くに川が流れていた。
川はそこにあるだけで安心する。
向こう岸が見えるのが良いのだ。
こちらではない世界がある。
常に見えなくても良い。
川の眺めが特別に好きというわけでもなく、川があるところだけちょっと視界が開けているとか、あの辺に川の気配がするな、と思うくらいでも十分だ。
私は川に何も期待していない。
期待していないが常にそこにあるのが良い。

ここよりも下流に架かる鉄橋の明かりの列が過ぎてゆくなり

嶋稟太郎

屋根裏部屋と似ている。
川では孤独が許されている。
広すぎると孤独に耐えきれなくなる。
海は無限だ。
私には広すぎる。
だから、孤独に耐えきれなくなった時は海を見に行くのが良いかもしれない。
蟹と戯れたくなる人の気持ちもわかる。
街を流れる小さい川は人間の生活のための機能を担っており、コンクリートの護岸は平面的で直線が多く、殺風景になりがちである。
それでも階段があって川の水面に近づけるような川は、階段を下り切れば思いがけなく孤独が得られることがある。
孤独が許される場所は殺風景とはいえない。
川にいる時の私は何も期待されていない。
街にある川は人の期待を負いすぎている。
小さな川では、ほとんど水が流れていないような細い川が好きだ。
街ができるずっと前からあったようなゴツゴツした岩盤が突き出していて水の流れを曲げているような川が良い。
雨が降った時にだけ水嵩が増しているのをみると嬉しくなる。
大きな川も良い。
海の近くを流れる川は潮の満ち引きによって水位を変えるので、干潮の時間には川底が見えるほど浅くなる時もある。
川の流れの中には石や砂が溜まって水面よりも高く盛り上がった中州ができることがある。
一番初めに住んだ街には日本で二番目に大きな川が流れていて、河口近くの中州は小さな町ができるほどの大きさだった。
中州はこちらでも向こうでもない。
ときどき、なくなることもある。
今住んでいる街にも川があり、毎朝電車に乗って川を渡り、勤め先へ通っている。
地図をみると、川を挟んで同じような町の名前があるのがわかる。
もともとは一つの町だったが、あるとき川の流れが変わり、町が二つに分かれてしまったのだという。
向こうの町にはまだ行ったことがない。

ご感想はこちらまで！ Twitter ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告 第18号

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄「新」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集

第18号 〆切 '23 12/31(日) 24時
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「新」1首

第19号 〆切 '24 2/29(木) 24時 ＼3周年!!／
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「3」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

編集後記

木々も色づき始め、すっかり秋となりました。過ごしやすい気候が続く今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。
わたしは、ブックフェアや歌集の批評会に参加したりと、少しずつ外出を増やしています。数日後には文学フリマ東京が開催されますが、4年ぶりにそちらにも参加予定です。どなたかとお会いできますように。皆さまにとってはどのような秋でしょうか。
次号は来年の1月発行です。テーマ詠のお題は新年ということで「新」。たくさんのすてきな作品を、お待ちしております！

編集鳥　千原こはぎ

今号のうたそら 第17号

参加歌人様……69名
連作欄……53名
テーマ詠欄　54名
一首評……5名

ご寄稿いただきありがとうございました！

コラム　早月くら さん
エッセイ　嶋稟太郎 さん

illustration: kohagi chihara

うたそら　第17号

発行：2023.11.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/